

DX/情報基盤の整備・強化

基本的な考え方

生産性向上の実現のため、新技術のキャッチアップとDX活用による仕事改革を推進するとともに、業務プロセスの変化へ柔軟に対応できるシステムを構築し、経営判断の迅速化を実現します。

成長戦略へのDXによる貢献

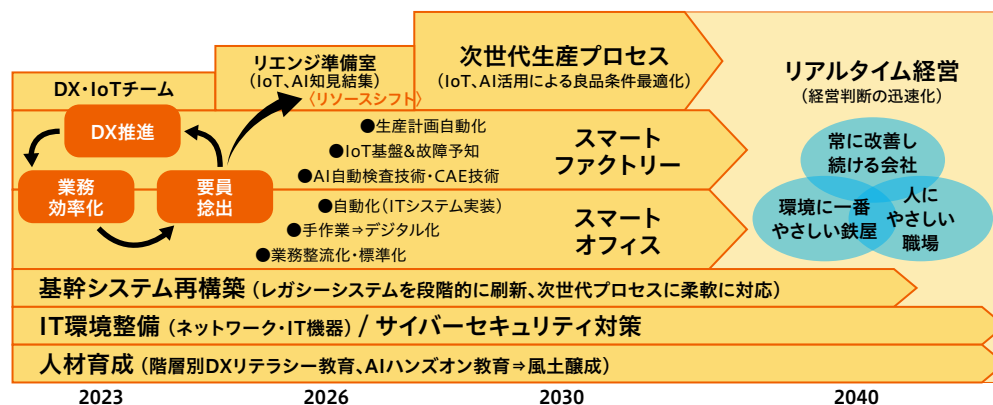
成長戦略の実現に向け、DX知見を積み増し、「人」と「モノづくり」の生産性向上に取り組み、2本柱「スマートファクトリー」「スマートオフィス」を目指します。

● 取り組み方策

スマートファクトリー (省エネ・工数削減)	AI徹底活用、生産計画自動化、IoTによるデータ分析・CAE技術開発
スマートオフィス(省人)	業務の整流化、標準化の徹底と手作業のデジタル化、自動化(システム活用)

今後の取り組み

「スマートファクトリー」「スマートオフィス」の実現に向け、基幹システム再構築などの積極投資を行い、各本部/カンパニーと連携して現場ニーズと技術シーズをマッチさせる仕組みや、次世代生産プロセスの実現に向けた体制の検討を進めます。



【事例】 社内基盤の強化

社内のAIチームが制作したアプリ群を「AS-AIs」(エーエス・アイズ)と総称し、社内データの活用基盤として各工場へ展開しています。

そのなかの1つ「AS-TSAD(エーエス・ティーエスエーディ)」は時系列データの異常検知(Time-Series-Anomaly-Detection)用アプリで、自動で社内IoT基盤のデータを取得し、そこから算出した異常度をグラフで確認することができます。また、さまざまなAIで異常検知を試すことも可能なため、設備故障の予兆検知などに活用しています。



リアルタイム経営の実現で、経営判断の迅速化へ

経営役員
モノづくり革新本部長

木原 一馬



2024年度はDXを駆使した業務効率化が各所で始まっています。IoT基盤の整備、データ解析ツールの開発で、トラブル解析・対応の迅速化、省エネが図られました。主力圧延工場の生産計画作成では、複雑な条件をAIなど駆使し自動化を実現しました。今後は生成AIの活用を全社に広めて、一人ひとりの小さな改善を多くの社員で実現し、大きな成果を築き上げていきます。また、2024年度は生産管理部、営業統括本部、各カンパニーの協力で物流改革にも着手しました。モノづくり現場におけるさまざまな問題が物流問題につながっています。TPS、TQM、TPMの取り組みをベースにモノづくり力のムダ・ムラ・ムリを排除しDXでさらなる効率化を図ることで、つくりと物流で大きな成果につなげていきます。